Thomas Jefferson に就いて

—そのアメリカ的限界—

廣　田　孝　一

On Thomas Jefferson: his Limited Outlook as an American

Takaichi HIROTA

（昭和２７年１２月２０日受理）

目　次

はしがき
Ⅰ，Jefferson における思想と行動の矛盾について
Ⅱ，Jefferson の親佛的態度に対する限界と Louisiana 購入問題
Ⅲ，アメリカ文化に対する Jefferson の自覚—Notes on Virginia について—
Ⅳ，バーバリー（Barbary）海賊問題について
Ⅴ，Francisco de Mirandaの Latin America 解放運動と Jefferson
結　び

はしがき

「凡そ愛国者は一個のとり済した自負を有し，彼の祖国に大關係あるものは同時に，世界にも亦重要の關係ありと信ずる傾向がある．私はこれに対して常に警戒せるが故に…」(1)との JOHNSON 博士の愛国者への警戒は，第一次大戰後の世界に指導的役割を演ぜんとするアメリカの一つの含みを示すものであろうが，同時にアメリカを中心とする現在の世界の動きを眺めながら Thomas Jefferson の祖国愛を考察するに当つても誠に興味ある暗示を與えるものと考えられる．

T.S. BAILEY のいうように Jefferson は「本質的にアメリカ人」(2)であり，当時の対西，佛，英外交關係の複雑な背景の上に立つとはいいながら，駐米佛国公使 P.A. Adet をして「Jefferson は自由と科学の友であり，更に從來の桎梏から解放した我々の努力に対しては礼讃者ではあるけれども……

……猶一個のアメリカ人であり，その限りにおいて眞の友ではあり得ない．アメリカ人は全欧洲人の傳統的な敵である．」(3) と警戒せしめる所以のものであり，一見矛盾の連続と見られるまでのその生涯はあくまでも「アメリカの公僕」(4)たる点において貫かれるという一つの限界があつた．彼は世界に通ずるの理想国家建設という思想家ではなくて，あくまでアメリカ国家を建設せんとする現実的なアメリカ人として見ることによつて正しく理解されうるものであり，同時に愛国者としては幅があるが，同時にその幅にはあくまでもアメリカ的限界が見出される一個の nationalist なる一面があることを強調したい．この意味において「正確なる文書によればよるだけ Jefferson を論ずるに当つて，予想外に Washington 並びに Hamilton をけなすべき結果を生じた」(5) と告白せざるを得なかつた Dumas MALONE の Jefferson 観は興味ある現代アメリカ的共感と見るべきではなかろうか．正に H.S. COMMAGER が指摘しているように Jefferson はアメリカにとつては「意識的に過去と袂を別つた最初の人物であり，アメリカの社会と経験の上に立脚した政治理念を樹立した最初の大指導者」(6)であつた．

したがつて，「"獨立宣言" が，若し地方的可能性と米国に關してのみの意義を有するに過ぎざるものならば，この "宣言" に就きて，諸君の前に喋々することを躊躇するものである．乍然，私は "獨立宣言" を以て他の国，他の大陸に於いても適用可能性を有し來るものと考える．」(7)との JOHNSON 博士の主張に対してはあくまで批判的であり，同時に "獨立宣言" の起草者として知らるる Jefferson に対しても批判的であり度いと主張しようとするものである．

註（1）ジョンソン博士講述（高木八尺，松本重治訳）；「米國三偉人の生涯と其の史的背景」P．28

（2）T.A. BAILEY; A Diplomatic History of the American People (N.Y. 1950) p. 91

（3）ibid. p. 73 (American Historical Association Annual Report, 1903. 11. 983, Adet to Minister of Foreign Relations, Dec. 31, 1796)

（4）Dumas MALONE; Jefferson and The Rights of Man (Boston, 1951) Introduction xix

（5）ibid. Introduction xxi

（6）H.S. COMMAGER; The American Mind (1950) p. 301

（7）ジョンソン博士講述；「米國三偉人の生涯と其の史的背景」P．28

1，Jefferson における思想と行動の矛盾について

「常に行動と思想との対立が見られる」(1)との KNOLES 教授の Jefferson 観は，「我々は総て共和主義者であり，聯邦主義者である」との Jefferson の大統領就任演説や，やがて行つた Louisiana 購入等によつて良く周知されているように全く異論のない所であろう．例えば MALONE が指摘するが如く「彼は opportunist であつた」(2)のであり，Hamilton にとつては「Jefferson は一個のソフィストであるとはつきり考え」(3) られていたのであり，「信用なき国家の存在は常に不安定なるもの」(4)との 1788 年のむしろハミルトン的な彼の見解はやがて Washington 内閣における Hamilton の同僚としての地位を承認することとなつた．(5)又「個人としてトム・ペインの "人間の權利" を是認したことが明らかとなり，貴族主義的傾向に対する反対派の指導者と見られるように」(6) なつたかと思えば，「政策上から見れば望ましいと考えている目標がはつきりしている場合には漸進主義者（gradualist）であつて，即時主義者（immediatist）ではない．又思想的にはペインよりはむしろ自由主義的なフランス貴族によく似ている」(7) ともいわれる複雜な性格は「常に靜止的であることなく，常に臨機應変に動いて行つた」(8) ものであり，「全く適應の精神」(9)というアメリカ的精神の代表者と見れば，その矛盾はむしろ矛盾ではなくなるというものであろう．

註（1）G.H. KNOLES; The Religious Ideas of Thomas Jefferson (The Mississippi Valley Historical

Review no. ? p. 188 （東大，アメリカ研究所蔵，抜刷）

（2）Dumas MALONE; ibid. Introduction xvii

（3）エルヴイン（本田良介訳）；「代表的アメリカ人」上巻 P. 123

（4）Dumas MALONE; ibid. p.288 (Jefferson to Madison, May 3, 1788)

（5）ibid. pp. 288－289

（6）エルヴイン（本田良介訳）；「代表的アメリカ人」上巻 P. 118

（7）Dumas MALONE; ibid, p. 355

（8）ibid. Introduction xxvii

（9）ibid. Introduction xxii

Ⅱ，Jefferson の親佛的態度に対する限界と Louisiana 購入問題

「Jefferson は本質的にアメリカ人ではあるけれども英国人に対してとは反対にフランス人に対しては熱心なる好意を示した」(1)のであるが，その親佛的態度には一つのアメリカ的限界ともいうべきものがあることは「フランス滞在の5年間を通じて……フランス革命の推移に關心を持つて來たが，彼の心は常に合衆国の建国から離れたことはなかつた」(2)という限りにおける親佛主義者であつたと主張したい．

しかしながら Jefferson が親佛主義者であることは依然として変りのないことであつて，例えば以下二例の政治漫画は聯邦党の爲にせんが爲の宣傳ではあるけれども，フランスが革命主義からナポレオン専制への傾向にしたがつて又專制化せんとするのが Jefferson であるというに至つては，無批判な親佛主義者として，彼を葬り去らんとする当時の党派的対立の激化を物語る好例であろう．

W. MURRELL 編著の No. 30 の政治漫画(3)は「反聯邦主義者を Jacobins として彈圧することに成功した Hamilton 達の凱歌を奏せる諷刺であつて， Washington は逞しい2頭の馬の手綱をにぎり，武装した義勇兵に守られて一際高く戰車を御している図である．明かに Gallatin, Citizen Genet, Jefferson と想像せられる三人の人物が "政治の車" を止めようと懸命になつている所が画かれている．その側で共和党系新聞 *Aurora* の編輯者 Duane が車の下敷となり，義勇兵の一人に踏みつぶされんとしている．犬が一匹この妨害者の新聞紙上に片足をあげている．画の左方に画かれているのはフランス恐怖政治の使者のたどるべき運命に対する聯邦党の見解を明らかにしたものである．」(4)

同著 No. 43(5) は聯邦党よりジヤコバン的親佛主義者と目されていた Jefferson は更に飛躍してナポレオン的專制政治に心醉する親佛主義者として画かれている．即ち「Gallic Despotism の祭壇の前にひざまずく Jefferson であり， Godwin, Paine, Voltaire, Rousseau その他の諸著作が燃えつつある．…Jefferson はまさにアメリカ憲法を焔の中に投ぜんとしたが，アメリカの鷲によつて妨げられ，鷲は蹴爪の一方で憲法を掴み，他の一方で Jefferson を襲わんとしている，恐らくこの印刷は大統領に当選することとなつた1800年の選挙戰中に印刷されたものであつた．」(6)

1790年代における聯邦党と反聯邦党の対立，ひいては一つは親英に傾き，一つは親佛に傾いた抗爭対立から來る混乱は Washington の「告別の辞」にも良く見られるが，当時の所謂 jacobin 的急進主義者の行動は，他面保守的な暴民の無智なる行動と相まつて，Jefferson 一個の漸進主義的偉大さでは如何ともしがたいものがあり，更に1793年の所謂中立宣言並に Jay 条約締結に際しての新興国アメリカの国民的自覺の强大さを見る時，国を思い猶且つその信念の上に立たんとする彼の行動には，心中察するに余りあるものがあつた．親英外交か，親佛外交かは当時のアメリカ人の何人にとつても，その生活そのものとも相交錯する一つの鍵であつた．その一例を1796年12月23日の反聯邦党系新聞 *Aurora* にとつて見よう．「国家が嘗て一個の男性によつて墮落せしめられたことありとするならば，アメリカ国

家は Washington によつて墮落せしめられたのである．嘗て国家が不適当なる人物の悪影響を蒙つたことありとするならば，アメリカ国家は Washington による悪影響によつて害を蒙つたのである．嘗て国家が一個の男性によつて欺かれたことありとするならば，アメリカ国家は Washington によつて欺かれたのであつた．將來我等はこの前車の轍を避けなければならない．Washington の行爲は正に前車の轍として我等のとらざるところ」(7)と，中立政策の名のもとに親英的傾向の強くなつた一少くとも反佛的に傾いた一ことを攻撃した．

この様な党派的対立の激化した90年代における Jefferson の親佛的態度には明らかに一つの限界が見られることは駐米公使 Genet に対しても見られる．A. KOCH は Jefferson の Madison にあてた1793年の手紙(8)を引用して次の様に述べている，「Jefferson が Madison に届くかどうかと心配した用件は．共和党は Genet に対する政策を変更すべき時期に到達したということであつた．

Genet は自己自体を阻害するのみならず共和党の利益をも阻害するが如き行動をとつたと彼を非難した．その狂暴なる行爲によつて大統領の中立政策並に大統領を個人的に支持するという世論を支持助成するという傾向が強められた．"諸都市は総て外人による母国政府への斯の如きあらゆる反対について，彼等が同意せぬことを一般に普及せんとしはじめている"と．Jefferson は説く，徒らに瑣事に拘泥すべき時ではない．正に"中立の立場を明確に肯定することこそ共和党にとつての上分別"であろうと．さらに"彼の祖国フランスへの強い友情とつながりは惜しまぬものではあるが，との氣持を明確にすると共に，他面我々の意図に反する行爲を Genet が行つたということも明確に肯定して完全に Genet を見棄てることは共和党の上々策である"と．

Jefferson は己の"過酷なるジレンマ"の因つて來る所を認識把握することによつて新しい政策を正当づけた．彼は正しい行動に戻りうる希望が明らかなる限り Genet を見棄てることが出來なかつた．"何故ならば私はフランス主義並にフランス国民を愛する国民の氣持を考慮に入れることは現狀として重要なことであり，又これをしりぞけるとすれば，その正当なる理由をいずこに見出すかということが重要であることを知つているが故に"しかしながら Genet は"最早度し難き"ものであつた．共和党は"彼に未練を残すことによつて蒙る可き破滅からは避ける方"が良い事であつたと．……

更に KOCH はつづけて此の手紙は Jefferson の親佛観の性格を明らかにするものである．即ち本国における共和政治と自由国家の主張はあらゆる外国への愛着に上位するものであつたことを示す．明かに彼は"フランス国民の主張"と"革命の主張"を有利に展開せしめるよう全力を拂う積りであつた．そのためにはたとえ，聯邦党が機会ある毎に彼に対して與えた悪質な，例えば残忍なる Jacobinism，無神論，非アメリカ主義の人身攻撃を與えるともこれを甘受したのであつた．彼は総てアメリカ外交政策が英国に近づいて行こうとするのを阻止したのであつた．然しながら彼は決して其の語のもつ單純なる意味の"理想主義者"ではなかつた．よく與論を注意した上で，此の国における共和党の利害關係は一時的にフランスを遠ざけることによつてよりも，国民を共和党から離れさせてしまう方に，より大きな被害があるものと見てとつた"と．」(9)

更に KOCH はつづけて「此の際における Madison と Jefferson との間の最大の問題はまず第一に，アメリカ人はこの危機に臨んでフランスの敵によつて"戰爭にひきずりこまれ，終には英国政治の下に"(10)支配されることのないよう注意すべきであると云うことにあつたと．」(11)

以上 KOCH の説明はアメリカの中立宣言を無視する Genet の privateer によつて，Washington と Jefferson の間に特に問題を惹起した際のものであり，中立外交方針の樹立後三ケ月の1793年6月5日，Jefferson が Genet に與えた手紙(12)においてもアメリカの權威を無視して武裝せる privateer を第三国人が自由に出動させることの不可を注意する冷たさが常に残つている．即ち，「貴下の先任者である de Termant 氏に対する5月15日付の私の手紙において……Charleston における裝備を終つ

た軍艦を尊重すると云うことと關連するものがあるが，我々が平和を維持している国々に対して巡遊する（戰闘のため）と云う点については未だ未解決だと考えられている．

其の後私が貴下と正式におめにかかつた際に次のようにお話し申し上げた．即ち，武装船の一つである，Citizen Genet 号が捕獲物をのせたままこの港に入つて來た．…大統領は此の問題に關して十分檢討に檢討を重ねた結果その国の圏内において如何なる他国のものからも主權が犯されることのないように禁止するのが，あらゆる国家の"權利"であり更にかかる事を禁止する中立国の"義務"は，交戰中の諸列强の一国を害する事になるのも当然である．更に合衆国における自国政府以外の權威によつて認められた軍事委員会は合衆国主權の侵害であり，特に自国に対して負うべき責務に不忠実なる行爲を犯すように指導せられてゆく事がアメリカ市民に認められると云う時には特にアメリカの主權を犯す事になるのである……」と．(12)

かかる Jefferson のアメリカ的立場は更に大統領として Louisiana 購入を決意しようとするに当つて1802年4月18日付駐佛アメリカ公使 Robert R. Livingston に宛てた手紙によつてもうかがわれる．即ち「フランスに対するスペインの Louisiana および Florida の割讓は合衆国に対して重大なる影響を與える．この問題に対して国務長官は，貴下に対して十分なる連絡はしたが，個人的にその事に対して繰り返えし觸れるには耐えられぬ程私のうけた打撃は大きい．此の事件は合衆国の全政治關係に全く相反するものであり，我が国策に新時期を劃することになるであろう．無思慮な諸国の中でフランスは權利の衝突を惹起すること最も少く，最も多く利害關係を共有する国である．從つて我々は從來，傳統的にアメリカの友であると見なして來ていたし又嘗て不和たることのなかつた国と考えていた．從つてその発展は我が国の発展であり，その不幸は我が国の不幸と考えていた．其所を所有するものは我が国にとつて自然的に或は習慣上我等が敵となる一点が地球上にある．それは New Orleans である．ここを通つて我が国の殆の生産物が市場に出なければならない．又ここは豊饒であるので間もなく我が国の全産額の半ば以上をこなしてくれるであろう．又ここはわが国の半以上の人口を持つ．フランスはその門戸に位して我が国に反抗の態度をとる．スペインは長い間そういつた態度を表には現わさずして持していたかもしれなかつたが，その平和策と，国家の脆弱性は，從來わが国に対して便宜を漸增してゆく狀態をつづけていた．從つてその場所をスペインが持つ事は我々には何等痛痒を感ぜしめることなく又恐らく近い將來においては，アメリカにこれを割讓することがスペインにとつては，より貴重であると認めしめるような事情がおきる可能性があつた．ところがフランスの手にこれが握られた場合にはそうはゆかない．……かかる事情からフランスと合衆国は，フランスがかかる挑発的な立場をとる時には長く友情を続けてゆくことは不可能である．我々と同様にフランスもまたこの事が分らなければ盲同然と云つていい．これを未然にふせぐ爲に，対策を講ずることをはじめなければ，アメリカは先見の明なしということになる．フランスが New Orleans を所有する時こそ，フランスが永久に衰退の一途をたどらねばならぬとの宣言が決定する時である．このことは相協力して排他的な大洋の獨占を維持出來る二ケ国の聯合を意味するものである．その時からアメリカはイギリス艦隊ならびにイギリス国家と連合しなければならない．」(13)と．

即ち．フロンチアー農民の繁栄と，西部発展に關する限り，彼の親佛外交は親英外交に切り換えられうるものであり，更に換言するならば，獨立国家アメリカの永遠の発展があくまで强い念願であつて，その意味における対大陸外交であつて，1803年「この日（Louisiana の購入）から合衆国は第一等国の仲間入りをする……」(14)と述べた Livingston の感慨はそのまま Jefferson にも当るのではなかつたかと考えられる。

註（1）T.A. BAILEY; ibid. p. 91

（2）長守善；「トーマス・ジエファーソン」P. 117

(3) W. MURRELL; A History of American Graphic Humor (N.Y. 1933) Vd. I. p. 36
この図はジヤコバン的フランス公使 Genet 並にウイスキー暴動を中心とする反聯邦党の活動（これは Washington の誤解）を彈圧することに成功した，聯邦党の栄光をたたえたものと考えられる．

(4) W. MURRELL; ibid. p.38

(5) ibid. p. 48
アンドレ・モーロア（鈴木，杉浦，別枝共訳）;「アメリカ史上巻」P. 319

(6) ibid. p. 49

(7) F.L. MOTT; American Journalism, A History of Newspapers in the United States Through 250 years. (N.Y. 1947) p. 128

(8) A. KOCH; Jefferson and Madison (N.Y. 1950) pp. 142－143 (Jefferson to Madison, Philadelphia, August 11, 1793. －Madison Papers, L.C.) この日付の第二回目の手紙

(9) ibid. pp. 142－144

(10) Madison to Jefferson, September 2, 1793. (Writings-Congrees I, 595－6)

(11) A. KOCH; ibid. p. 144

(12) Ruhl J. BARTLETT ed.; The Record of American Diplomacy p. 91 Thomas Jefferson to Edmond C. Genet, Philadelphia, June 5, 1793. (Lawrie and Clarke; American State Papers, Foreign Relations Vol. L.P. 150)

(13) ibid. pp. 104－105 Thomas Jefferson to Robert R. Livingston, Washington, April 18, 1802. －House Ex. Docs. (4531) 57th Congress, 2nd Session, no. 431, pp. 15－18.

(14) T.A. BAILEY; ibid. p. 91

Ⅲ，アメリカ文化に対する Jefferson の自覚 —Notes on Virginia について—

松本重治，日高明三両氏は下記の様に「ヴァジニア覺え書」に対して解説していられる．

『「覺え書」を通じて感ぜられることは，アメリカの事情を科学的に，(1) 正確にヨーロッパ人に傳えようとする愛国者ジェファソンの熱情であり，新大陸は舊大陸には負けていないという自信であると．』(2)

例えば American red man を見たこともない有名なフランスの自然科学者 de Buffon が，彼等の劣等性を主張するのに強く反対して，「同じ食物を與え，同じ運動をさせても，女性に対する關心において白人に劣るものであり，より impotent であるとの意見には反対する事が出來る」(3) と America Indian に關してもアメリカ的愛情をしめす。

更に，de Buffon が「新大陸の動物は舊大陸のものに較べて倭少であるとし，その理由はアメリカの氣溫はヨーロッパより低く，水はアメリカ大陸いたる所に充満し，しかも人工的に調節される事が少い．即ち氣溫は大動物を創るに資するものであり，水は反対である」(4) と主張しているのに対して，「アメリカの氣候は溫度と濕度に於て相当高いかどうかと云う疑問視さる可き前提があるが故に，此の学説には首肯出來ない．この仮定にたてば濕度の高いと云うことは動物の成長には不利であると云う他の仮説を認める事となる．即ち此の仮説が正しいかどうかは，論理的思考によれば先天的に了解出來ぬものである．自然というものは，その活動様式 (modus agendi) を我々に対して隠しているものである．かかる問題に対する我々の唯一の要求は経驗によれと云うことである．しかも経驗はその仮定に反対であると思う．植物が大地の諸要素たる空氣，水，火から生れ出るのは，氣溫と濕氣の助力によるものである．從つてより濕潤な氣候は，より大量の植物を育て上げるものだと解する．植物は直接，間接に全

動物の食料である．從つて，食料の量が多ければ，動物はその数を増加するばかりでなく，その本質の許す限り形態は改良されると解する」(5)とし，「之を証明するために両大陸共通の動物に關する長い一覽表を作り」Buffon の仮定に対する反駁(6)を有力ならしめんとしている．

「こうした議論は先ず de Buffon に対する反駁から始まつているが，自然科学者としての彼の才能には非常な尊敬をはらい，彼を憎む事はしなかつた」(7) Jefferson は『「アメリカ人は一人のよい詩人，一人のすぐれた数学者，藝術科学における一人の天才を産んでいない」という Abbé Raynal の批評に激怒して，「自由を信ずるものの存在する限り，忘れんとして忘れ得ぬ Washington」を出したではないか，「当代の何人よりも，より重要な諸発見をなし，自然現象についてのより聰明な解釈を試みた Franklin」を産んだではないか？ われわれは，天文学と数学においては世界一流の Rittenhouse を持つているではないか．「かくの如く哲学や軍事におけると同様に政治においても，弁舌においても，繪画彫刻においても，若年のアメリカはすでに有望な才能を示しているではないか．」といつてアメリカ人の自信の程を吐露しているのである．』(8)

即ち Jefferson のアメリカ的自覺は，彼の Virginia 大学の創設を墓標に特に刻みこませた事によつても理解せられる如く，その藝術文化の奬励と相俟つて舊大陸文化に対する，新大陸文化の興隆とその特異性に対する大いなる自覺であり，より大いなるアメリカへの誇りを強調した結果であると考えられる．

アメリカ人としてのアメリカ文化自覺に対して，その当時の舊大陸のアメリカ蔑視は想像の外であつたことは，20世紀においてすら依然として存続することであつて，例えば．「1920年代のアメリカの興味は……そこにはアメリカに対する愛情よりも遙かに大きなヨーロッパに対する愛情の熱が潜んでいた．だからこそ，それは今でもわれわれの心から完全に拂拭しきれない，アメリカに対するいわれのない輕侮の感じをくすぐつてくれるのである．」(9)との東宮隆氏の批評においても理解せられるであろう．

南米の現代政治家 Carlos DAVILA(10)も亦同様な事をその著に於て次の様に説明している．即ち「動かす可からざる古典的とまでなつたヨーロッパ的概念によつて盲目にされて，彼等は非ヨーロッパ的なるものは拙らぬものであると考えた．非ヨーロッパ的様式，非ヨーロッパ的文明は，單に異質的であるばかりでなく，劣等なるものであつた．大西洋を渡つても続いているこの考えは，現在も尙依然として存続している．正に大陸自体こそは，人口増加の排口となるという希望の誠に大である anaphrodisiac 的なものと見なされていた．著名なるヨーロッパの思想家は此の大陸では犬が吠えることが出來ぬようになるのではないかと，至極眞面目に論議をたたかわしたものであつた．ここでは喉笛という喉笛は退化して声が出なくなつているというのであつた．ここでは昆虫，冷血なる爬虫類，更に有害なる動物のみが繁栄出來るのであつて，象，河馬，馬，犀，駱駝，麒麟の如きものは棲息には不適であり，又それらの化石すら発見出來ないのである．アメリカ虎（jaguar）アメリカ豹（puma）は威嚴のある虎の滑稽なるにせ物である．アメリカには小麥がなかつた．……砂糖や珈琲もアメリカに移植されると又退化して，味も香も減つてしまつた．之等の賢人達は第一の決定的な弱点として，此の大陸には鉄がないことを強調した．鉄が発見された時には，それは脆いと批評されていた．之らの批評は総てヨーロッパのアメリカ嫌悪症（Americanophobia）ではなくて，18世紀を通じて栄えた哲学的，科学的確信に立つていた．Abbé Cornelius de Pauw は1768年その著 Philosophical Research on the Americans に於て "完全なるアメリカの獨立は倫理的に不可能事である" と説いた．de Pauw を "眞の科学者" と称した Voltaire は 18 世紀の末，Canada は役に立たぬ氷柱の群立する場所で，大西洋のこちら側の人間にとつては食料に供せられるものは何もない所であると再三いつていた．偉大なる Buffon に率いられる当時の科学者達の大多数は，新大陸に關する上記の事実を一般に拡めた．19世紀に於てはドイツの哲学者 Hegel は "アメリカは從來常に自己を肉体的（physically）に表現し，精神的（psychially）

に表現する能力がなかつた．しかして現在も尙そうである，と書いている．Hamilton は斯の如き見方が生れるのを，遠く距つたヨーロッパ人の尊大なうぬぼれと非難した．……之等諸説のアメリカ劣等観は面白いと思われるかも知れないが，奇妙に強い生命力をもつているものである．現代のヨーロッパの哲学者達は今なお此の考え方に動かされている．数年前にドイツの Keyserling はアメリカでは"動物的本能（animal instincts）が拡く普及しており，ヨーロッパでは精神的なるもの（spirituality）によつて動かされていると」(11)と．

斯くの如き20世紀にまで継続する舊大陸の新大陸蔑視に対する反撥は恐らく Jefferson の祖国アメリカを愛する熱情をゆさぶつたであろう事は想像にかたくないところであつて，ここにフランス政府の行うアメリカ調査報告に資するための Notes on Virginia 作製への熱意が生れでる所以があつたのであろう．

註（1）Jefferson は自然科学者としては「殆んど半可通の知識しかもたず」と．（モーロア，上記アメリカ史上巻P.320）
（2）アメリカ学界訳編；「原典アメリカ史」第二巻　P．244
（3）Notes on Virginia 61．（Claude G. BOWERS; The Young Jefferson p．294）
（4）Claude G. BOWERS; The Young Jefferson，1743－1789（Boston，1945）p．296
（5）Notes on Virginia，56（BOWERS; ibid．pp．296－297）
（6）特に麋（おすじか＝moose）などを例にとり（原典アメリカ史第二巻　P．244）
（7）C.G. BOWERS; ibid．p．297
（8）上記原典アメリカ史 p．244，（P.L. Ford，The Writings of Thomas Jefferson 1894．Vol．Ⅲ pp．167－169）
Notes on Virginia，67－69（Bowers; ibid．pp．297－298）
（9）ハロルド・ラスキ（東宮隆訳）「アメリカ・デモクラシー」P．4
（10）DAVILA，Carlos Guillermo（1887－　　）は南米チリの外交官，政治家，1727—31年アメリカ大使，1932年チリ大統領となる．國家社会主義者
（11）Carlos DAVILA; We of the Americas（1940）pp．12－14

Ⅲ，バーバリ（Barbary）海賊問題について

大統領 Jeffeson の政策転換について T.A. BAILEY は次のように述べている．

「何か悪魔の魂に魅入られたように，政策上の急迫狀態——特に外交關係の——は共和党の從來維持して來た全政策をして実質上逆転せしめた．從來彼の政策は，第一に，本質的にアメリカ人であり，更に英国人を強く憎む一方フランス人は熱愛する．第二に，ヨーロッパとの外交的紛糾にまきこまれることに強く反対する．第三に，国債の節約と削減の決意，第四に，農民派の指導者として，費用の多いフリゲート（frigates）を嫌い，これは聯邦党の製造業者や海運業者の道具と認めて，これを Potomac 河畔に陸上げすることを主張する．第五に，彼は嚴密に云つて不戰論者ではなかつたが，戰爭に対しては強く反対し"平和は我々の情熱である"と宣言．第六に，憲法の嚴格解釈を行つて聯邦党の中央集權化を攻撃するのであつたが，この考え方は，多年続いた Barbary 海賊問題を解決しなければならない必要性と正面衝突した．」(1)

從來海軍力弱き諸国を常に好餌としつつあつた Barbary 地方(2)の海賊に対する Jefferson の積極政策は終に，アメリカ艦隊の派遣ということになつた．この事は欧洲諸国との外交的紛糾の憂はないとしても，彼の Louisiana 購入におけるが如き矛盾を感じさせるものである．

彼は早くから此の問題と聯關があつたのであつて，「嘗てフランスに使していた時代．バーバリ人の捕虜となつたアメリカ船員を釈放する任務にたずさわつた事があつた．この同胞の苦痛に刺戟され欧洲

列強が連合して，この海賊を根絶しようと提案したことがあつたが何の反響もなかつた．その後もこの傾向は持続されていて，所謂不戦論者 Jefferson が大統領に就任した時も，この耐えがたい現象は依然として未解決のままであつた．」(3)

Barbary 諸国とアメリカとの Presents（贈物）により保護をうけるという奇妙な外交關係は1832年 John Quincy Adams が議会において報告している如く，「交渉を完結する爲に贈物をするという方法は欧洲に於てさえも普及していた……ものであつて，特に思いもうけぬアラビア馬や，モロッコ•ライオンを贈られたアメリカ大統領 Jefferson, Van Buren, Tyler の悩みは19世紀の半ばまでつづいたアメリカ史上誠に面白い逸話であつた．」(4)

Charles WARREN によれば「アフリカ並にアジアの統治者達と条約關係を結ぶために欠くことの出來ぬ条件は，金銭とか，その他高價な物品を贈與することであつた．之等の贈物は婉曲にいえば礼儀正しさと，尊敬とを意味するものであるが，実際には單なる賄賂であり，貢物であつて，実は一般的にそう大した値打のものではなく，その国の役人に対して贈られたものであつた．例えば1786年 John Adams と Thomas Jefferson がモロッコ皇帝と結んだ条約の價格は10,000ドルであつた．1795年の Algiers と合衆国との間の条約は海軍々需品で毎年21,600ドルの貢物を贈ると云うことと，その他の支拂を行うと云う約束で買われたものであつた．此の支拂と云うのは，貢物の外に90,000ドルに上るものであつた．即ち Algiers 知事（Dey）の家族の全員に対して，それは料理人にいたるまで，その階級に應じて規定の料金を合計したものであつた．国務長官 Edward Everett(5) の議会に於ける報告によれば，その爲の費用全額は1797年には992,463.25ドルであつたが，これらの支拂は条約自体では"平和の代償"と呼ばれていた．1797年の Tripoli との条約は贈物として金，銀貨で40,000ドルと13個の時計，五個の指輪（その中三個はダイヤモンド，一個はサファイア，一個は時計つきのもの），41 ells の布と，四枚の鍛子の Caftans，加うるにスペインドル12,000の後拂を贈らなければならなかつた．Tunis との条約は1797年には現金107,000ドルと贈物を要した．Tripoli との条約は1805年にはアメリカ市民の捕虜に対する賠償金として60,000ドルを要した．」(6)とある．

これ等 Barbary なる北阿回教諸国に対する金で購なう条約は『Washington 大統領以來合衆国にとつての恥辱的傳統であつた．"国防のためなら何百万弗でも出そうが，貢物としてなら一仙でも嫌である"，と共和政府の市民達が声をからしてわめいている正にその時に，一方ではアメリカ船が掠奪されぬように，貢物として21樽の金をのせて Algiers に到着したのは皮肉きわまる話であつた．合衆国の權威失墜の最高の時機は1800年10月であつた．Algiers 知事は戰艦 George Washington 号の国旗を下させ，Algiers の旗にかえて Constantinople への派遣使を乗せ，トルコ皇帝に拜謁させようとした．艦長の反抗も空しく，知事は答えていうに「貴下は，余に貢物を贈る．即ち余の奴隷となつたのである．余は自由に命令を下す權利を有するのである．」』(7)と．

「Jeffersonの大統領就任早々のことであつたが，貢物の義務がおろそかになつたと云う理由で Tripoli の Pasha はアメリカ領事館の旗竿を切り倒して，合衆国に宣戰を布告した．Jefferson の主義の中の三つ，節約の奬励，海軍への嫌悪，戰争廻避の主張は忽ち難關に縫着した．しかしながら国旗の名誉と，アメリカ船員の安全を思い，更にバーバリ人の残忍なる行爲を見た時，Jefferson の熱血は火と燃え，終に從來の主張を一擲して，冒険ではあるが，究極的には経済的である地中海への艦隊派遣という壯挙を敢てすることとなつた。1805年は，終に他国の從來なし得なかつた有利な条約をこの地方に対して獲得した．」(8)正に標題の如く"War Becomes Cheaper than Peace"(9)であつた．「この勇敢なる Jefferson の行動は，やがてアメリカ商業を廣く解放し，American nationality を强化し，更に合衆国に対する尊敬を新しく目覺しむる政策の端緒となつたのである．」(10)との愛国者としての面目が見られる．

註(1) T.A. BAILEY; ibid. p. 91
(2) Algiers, Tripoli, Tunis, Morocco の北阿回教諸國
(3) T.A. BAILEY; ibid. p. 92
(4) Charles WARREN; Odd Byways in American History p. 4 (Harvard Univ. Press, 1492)
(5) 1852年國務長官となる
(6) Charles WARREN; ibid. pp. 3−4
(7) T.A. BAILEY; ibid. p. 92 (G.W. ALLEN; Our Navy and the Barbary Corsairs p.177)
(8) ibid. p. 92
(9) ibid. p. 90
(10) ibid. p. 93

V, Francisco de Miranda の Latin America 解放運動と Jefferson

主義，主張の上から深刻に悩みつづけながら，なお且つ，その親佛政策の限界性に正当性を見いだそうとした Jefferson は，Latin America 解放の先驅者であつた Venezuera の Miranda に対しては，ほとんど一顧だに與えていない．ここには自由なる社会の建設を目指す Jefferson らしい情熱は，まつたくあらわれていない．換言するならば，彼にとつては，なによりも先に rising nation(1) の育生発展が考慮されるものであり，ここに革命家 Jefferson の限界があり，同時に Monroe Doctrine が，さらに Pan-Americanism の育ちゆく歴史的基盤があつたのであり，第二の獨立戰爭といわれる米英戰爭が遂行され，合衆国の国際的地位が確保されてしかる後に，Latin America にたいする合衆国の積極的外交が生れるのである．

かかるアメリカの傳統にたいして，Carlos DAVILA は当然批判的である．その著 We of the Americas において，アメリカ革命の時代より1948年の Bogota 会議にいたる間の inter-American relations を見事に解剖分析して，南アメリカはアメリカ合衆国との協力において，つねに平等なる根本原理に立ちうることを証明し，さらに合衆国の主張する Pan-Americanism に対して批判を加え，冷たい戰爭の支配下においては，南北アメリカを完全に統一する地域社会の構成を拒否するがごときかたくなさは，恐らくアメリカ人全体を不幸に陷しいれることになるであろうと警告している．

從つて，Pan-Americanism が眞の平等なるべきを主張する DAVILA には，次のような批判が Jefferson に対して與えられることとなる．すなわち「Alexander Hamilton, General Henry Knox, Rufus King の政策がいれられたならば，恐らく合衆国は Latin-America の諸国を援助して，これを連邦の一部とするようになつていた筈であつた．しかしながら，不幸にして Jefferson, Madison, Adams のより愼重ではあるが，煮え切らぬ政策が一般に採用された結果，合衆国の外交政策は，表面的には同情的な消極的援助の形式をとるべきであつたが，事実は嚴格なる非協調的中立政策に変つていつたのである」(2) と Jefferson に対して遺憾の意が表されている．このことは「Pan-Americanism の先驅者の一人として，アメリカ人の協力とアメリカの統一を夢みる」(3) 彼に対する当然の批判であろう．

C.G. BOWERS は，「Jefferson の活動を通じて具現された政治理念は，矢張り一つの国家について考えていたのであり，さらに国家形態の範例たるべきものを意識していた」(4) のであつたが，しかも「この国家構造が示す社会的，政治的理念は，今日 Americanism と呼ぶものと synonym であり，……Jefferson 時代のアメリカ建設に Americanism の text-book を見いだし，……"Jefferson の理論は自由社会の定義であり，原理である" との Lincoln の考え方の歴史的具現である」(5) とするのであるが，このことは「ひいては world democracy のための一つの program である」(6) と考える

こととの間には越え難い限界があるものだと，私はいいたいのである．こうした Jefferson に見られる一つの限界は，Miranda の革命運動にたいする彼の關心においてもまた見られるのではあるまいか．C. Davila は "Jefferson, Hamilton, and Early Defeat of Pan-Americanism" なる章において，「スペイン本国にたいするスペイン植民地の抗争に当つての Jefferson の中立政策は，Latin America の愛国者達から友情と助言，援助を奪つて，その結果最初から繁栄した聯邦社会が建設される可能性があつたものを，長い間無秩序な断片にしてしまつた．Jefferson の見解は從來平和裡に Florida と Louisiana を獲得しようという見地から正当なりと考えられていたが，この最後の目的は，方法の相違はあるとしても，Latin America の革命を援助するという Hamilton の目的と同じではなかつたか．"まさに掌中にころがりこもうとする誘惑物" と Hamilton がいつていた Louisiana と Florida は明らかに侵略的なアメリカ遠征軍最高指揮官の軍事的対象ではあつたが，これはまた同時に，愼重にして効果的なる Jefferson 外交の目的物でもあつた」(7) と断定し，さらに続いて，「この場合の両人の外交方針の相違を，Washington の「告別の辞」の草案者として中立外交を樹立した Hamilton にたいして，当時これに反対をとなえた Jefferson が大統領としてスペイン植民地の獨立戰争に当つて，あくまで中立政策を固持して欧州外交との紛糾を避けようとした」(7) ことと比較して，両人の合衆国建設觀に一層の興味を喚起している．

Francisco de Miranda の傳記については，正確，精密なる調査を，すでに William Spencer ROBERTSON が Annual Report of the American Historical Association—for the year 1907—in two volumes Vol. I (8) において発表している。

当時スペイン領であつた南米 Venezuela の Caracas に生れた(9)奇妙な小男の，富裕なる軍人であつた(10) Miranda は「Stiles (11)が "教養はあるが，燃えるような自由の子" と特徴づけた性格の持主であつた．合衆国にわたつた Miranda は既に 1784 年には色々なアメリカ人に会つている筈であるが，その中に Knox 將軍もある．(12)彼の尽力によつて Latin America 解放運動は漸次アメリカ人の興味を喚起することとなつたが，その後，彼は Washington 將軍にたぶん会つている筈である．ただしこの場合，その革命計画を Washington にうちあけたという証據はない．かといつて反対に Miranda がこうはしなかつたとも確実にはいえない．(13) しかしながら Knox, Hamilton に關する資料からは，もう少し証據があげられるのであつて，Miranda の Knox 宛ての手紙によれば，両人は数回会合し，その際その革命運動について，ある程度具体的に参画したことは確かである(14) と ROBERTSON は肯定的に述べている。」(15)

彼はさらにつづけて「Hamilton と Miranda との關係もまた正確を期し難い点があるが，1784 年には，Hamilton は Miranda から，その運動にたいする意見を徵せられている筈である．その後の關係が十分に示すように，Miranda は Hamilton を合衆国で協力して貰いうる最有力者と信じていた．彼の Miranda の手紙にたいする批評として，1798年に Hamilton の述べているところは "数年前この男はスペイン領アメリカから南アメリカを解放する計画に非常に熱心であつた．そのことで私は屢々彼と話しあつた．そしてその目的に有効な方法について忌憚ない意見をかわしあつた．そして合衆国も關心をもつとの意見を與えたように思う"(16) と述べた」(17) と説明している．

その後，Hamilton が Latin America 解放計画に熱狂したのは，丁度 X.Y.Z 事件のごとき対佛的国民感情の高揚された時であり，「"フランスのもてる世界帝国の野心に打撃を加えるには，スペインから南アメリカを分離するにある"(18) という積極政策から來たものであり，英国と協力して，南アメリカ遠征軍の総帥として，馬上これが指揮にあたることを想像していた．(19)」(20) この際の彼には「少年時代よりの夢が実現したものとして，まさに Alps を越える Hannibal の概があつた．」(21)

この Miranda につながる Hamilton の共鳴の中には，Jefferson の親佛政策とは逆に，English-

speaking countries の連合を必然的に意味するもの」[22]が明らかになつたことは，アメリカ発展史上から見て注目に値する傾向といわねばならない．

これに比して，自由なる社会の建設にその生涯を捧げたといわれる Jefferson の態度はどうであつたか．1816年，Monroe に與えた助言において，「国際法の許す範囲内で，南アメリカ人にあらゆる援助を與えるべきである．彼等は獨立を希望しているが，正義はこの希望を義務ならしめる．彼等は自由たるべき權利を持つており，またわれわれは彼等を助ける權利を持つている」[23]との熱意を示した Jefferson は，「1808年においては，依然として嚴正なる中立政策を持してのぞんでいる．」[24]この間の事情について，S. BEMIS は次のように述べる，「從來 Cuba 並にその他のスペイン領に対して強い關心を持つていた Jefferson は，戰爭は避けるべきであるが，フランス乃至英国の支配下にこれらの地方が屬することになるは許されぬと考えていた．この間，英国の默認のもとに，Miranda は革命運動を継続していたが，1805年アメリカ国務省がこれを支持してくれるよう要請して，国務長官 Madison に拒否された．Cuba の代表は1808年に大統領 Jefferson を訪れて，目前に迫つた Napoleon の支配から救うために，合衆国に併合することを提案したが，彼はこれにたいして十分なる熱意を示さなかつた．」[25]この Hamilton との相違は，そのよつて立つ社会的基盤が，一つは商工業階級にあつて，海外貿易の開拓が喫緊事であつたにたいし，一つは農民層に立つて，商工業階級，特にその海外貿易にたいして苦々しさを持つていたことから來るものではあつたが，さらに実際的な経済的利害關係に考慮をおこうとする Hamilton と，質的な内容への考察がまず問題とされなければならなかつた Jefferson の理想主義的性格が，重要なる要素であると考えられる．あきらかに，ここにはいわゆる野心的性格の Hamilton が革命に参加し，これには参加しない Jefferson には，所謂革命主義者でない革命家としての彼の限界があつたと見るべきではあるまいか．

例えば「当時巴里にあり，Miranda の計画に参加していた Col. Smith[26]を通じて，Jefferson と Miranda の交渉が始められているようである．1793年 Smith は国務長官たる Jefferson に，この問題について訪問して佛国官吏 Lebrun[27]からの手紙[28]を大統領 Washington に手渡している．しかしこのフランスと合衆国がある程度協同することになつている遠大の計画は実行されなかつた．」[29]その後も Jefferson と Miranda との間には特別の交渉はなかつたようであるが，Robertson によれば，元來 Miranda なる人物は，陰謀的なる革命家ともいうべきであつて，両大陸にたいして，軍事的，経済的援助を求めて遍歴しており，その結果好意ある援助というよりは，外交的權謀術数の傀儡に終るという悲劇的要素は，その目的のための遍歴中，ロシア女帝 Catherine の情事を噂されていることと思い合せれば，全き一世の風雲兒であつた．かかる性格は当然 Jefferson とは肌のあわないものであつたと同時に，対立的な Jefferson と Hamilton を，同時に利用することは Miranda の才能では出來なかつたことであろう．

加うるに，Miranda の革命計画は，「1791年英国首相 Pitt に提示されたものによれば，[30] "自由と獨立" の原則に立つて，スペイン領アメリカを聯邦組織にするものであつて，東は Brazil，Guiana の海岸線ならびに Mississippi River の線を境界とし，北は Mississippi River の源である北緯45°を太平洋にまで貫く直線が境であり，西は太平洋の海岸であり，南は Cape Horn の失端を国境とする廣大なるものであつた．」[31]これにたいして Jefferson は「アメリカ人にして最初に太平洋岸に航海した Captain Cook の乗組員 Connecticut の John Ledyard によつて，この方面へのアメリカの眼を開かれいたのであり[32]またスペインにある Carmichael 宛の三通の手紙[33]によつてもうかがわれるごとく，既に1787年には Panama Canal を通して太西洋から太平洋につながる日を夢みていたのであつて見れば，Miranda の計画と彼の理想とは相反するものであり，さらに理想主義者でもありながら現実的でもあつた Jefferson には，この Miranda の誇大妄想的な計画は理解しがたいものであ

つて，「頑迷と圧制になれて來た南アメリカの諸国民が自覺なくして解放された場合には，かえつて軍事的專制主義に陷り，彼等相互の闘爭と云う不幸を見ることとなるのであつて，合衆国の実例を彼等自ら体得して自ら自治の資格を得る時期を待つことが望ましい」(34)と考えたことであろう。

さらに Miranda の佛国にたいする關係は，丁度フランス革命主義の踊子 Genet と同じく，フランス政府の傀儡に過ぎぬものであつたことは，Genet にたいすると同じく Jefferson の共鳴をひかぬものがあつたであろう．ROBERTSON によれば，「合衆国にたいする Genet の革命的使命と軌を一にする革命工作に Miranda を参画させようとする意向は，1792年11月の Lubrun の決定(35)に起因するものでめつて，この計画によれば，北部においては Genet を合衆国におくり，アメリカ邊境の農民の援助を期待し，南部においては Miranda を Santo Domingo に派遣し，同時にスペイン領アメリカにおいて革命を起させるという計画であつた．」(36) これは勿論 Washington により阻止されたのであるが，かかるアメリカ国家の発展を無視する Miranda にたいしては，Jefferson の關心は求め得られなかつたことであろう．

かくして親佛家 Jefferson のアメリカ外交は，欧州諸列强にたいする中立を維持する限り，スペインを犠牲にしても English-speaking people の優越裡に展開する道をたどらざるを得なかつたといわなければならない．

註(1) Jefferson's First Inaugural Address《H.S. Commager; Documents of American History. (N.Y. 1942) p. 186》

(2) C. DAVILA; ibid. p. 19

(3) 長守善；「トーマス・ジエファーソン」P. 248

(4) C.G. BOWERS; The Young Jefferson, Preface vi

(5) ibid. Preface v

(6) 同上カヴァー廣告文

(7) C. DAVILA; ibid. p. 163－164

(8) William Spencer ROBERTSON; Francisco de Miranda and the Revolutionizing of Spanish America

(9) Bernard MOSES; Spain's declining power in South America 1730－1806 (1919) p. 312

(10) Claude G. BOWERS; Jefferson and Hamilton, the Struggle for Democracy in America. (N.Y. 1927) p. 427

(11) Stiles' Diary. Ⅲ. 130－132, Ezra Stiles は Yale 大学総長と考えられる《Robertson; p. 250(b)》

(12) Miranda to Knox, February 9. 1785, Knox Manuscript, XVII, f, 172.

(13) ROBERSON; ibid., p. 251 (b) Knox への Miranda の数通の手紙の中で彼は Washington によろしく頼むとあり，1792.11.4付の手紙で Miranda は近く Washington に会おうと思うと述べている．(Knox. MSS., XX, f, 20)

猶 Document No. 5 として巻末にあげられてある佛文1798.10.19付の Hamilton 宛の手紙は後述 Hamilton のラテン・アメリカ遠征計画と Miranda, Washington の関係をも示すことにもなるので抄訳したい．

「親愛なる將軍，去る8月22日付の貴下の御手紙を有難く拜受しました．貴下の御希望は既にいわば満されているのであります．と申しますのは，一方において陸戰では陸上の援軍は專らアメリカ人であらねばならないから恐らく英軍を使用しないであろうということと，……が当地では認められているからでありますから．全く賛成でありますが，電光のように出発するために貴下の有名な大統領の行爲をただまつばかりであります……F. de Miranda 於ロンドン」

(14) Miranda to Knox, March 15, 1790, Knox MSS., XXV. f, 178
Sayre to Knox, June 15, 1790, ibid. XXVI, f, 76
Miranda to Knox, November 4, 1792, ibid XXXII, f, 176

(15) ROBERTSON; ibid. p. 251

(16) February 7, 1798. Hamilton MSS., XX, f, 208, 209

(17) ROBERTSON; ibid. p. 251—252
ROBERTSON; Hispanic-American Relations with the United States (N.Y. 1923) p. 61 には「1784年の秋合衆國を訪れた Miranda は Hamilton, Henry Knox に会い, Washington にも会つたことであろう」とある.

(18) Hamilton's Works, X, 389

(19) see Kings *Works*, Ⅱ, 649; ; Ⅲ, 556, 565; Adams *Works*, Ⅹ, 145 and 147

(20) C.G. BOWERS; Jefferson and Hamilton p. 428 上掲註 (13) cf.

(21) Gene LISITZKY; Thomas Jefferson (Chicago 1933) p. 258

(22) C.G. BOWERS; Jefferson and Hamilton p. 427
猶アメリカに住む the English-speaking people がスペインを犠牲にしてその領土と勢力範囲を擴大する第一歩は1790年の英西の Nootka Convention に始まる.(Robertson; ibid. p. 284)

(23) 長守善;「トーマス・ジエファーソン」 pp.249—250

(24) S.F. BEMIS; A Diplonstic History of the United States N.Y. 1950) p. 197

(25) ibid.; pp. 196—197

(26) Col. W. Smith は1805—1806には特に Miranda の計画を援助している.

(27) Lebrun, Charles Francis は Dumouriez (1792,3—6佛國外相) のもとに仕えたことのある行政官.

(28) FORD; Works of Jefferson, Ⅰ, 216, 217

(29) ROBERTSON; ibid. p. 292

(30) Miranda to Pitt, September 8, 1791, Am. Hist. Rev., Ⅶ, 713
綿密なる統一後の政治組織にいたるまでの paper plan は Hamilton の南米遠征計画と一脈相通ずるものがある廣大なるものであつた.

(31) ROBERTSON; ibid. p. 272

(32) BEMIS; ibid. p. 269
Paris において Jefferson は Ledyard に会う. (Bowers; The Young Jefferson p. 425)

(33) C.G. BOWERS; The Young Jefferson pp. 425—426 (Ford, Writings of Jefferson, IV. 473, V, 22)

(34) 長守善;「トーマス・ジエファーソン」P. 249

(35) Lebrun to Dumouriez, November 6, 1792, Sorel, L'Europe et la Rev. Fr., Ⅲ, 157

(36) ROBERTSON; ibid. p. 293

結　び

アメリカ人としての Thomas Jefferson の自覺について, 以上まことに限られた角度からの例証を試みて來たのであるが, さらに注目すべき批判として, アメリカ•デモクラシーならびに Jefferson に対する, 英国人としての LASKI 教授の見解がある. すなわち「だいたい南北戰争くらいまでのあいだ……これに一定の型を與えていつた支配的な性格は, イギリス的傳統であつたというのが, 多分眞実に

ちかいであろう．……とはいえしかし，それはいつも一風変つたイギリス式で……ジェファスンとか，フランクリン……とかいつたような人々が，ある意味での生粋のアメリカ人だということは，しかもかれらがそのとことんの性格を発揮しなければならない場合にだけ，自分の中にあるイギリス的な遺産を一つの要素にするに過ぎぬ，生粋のアメリカ人だということは，疑いをいれぬところであり……トマス・ジェファスンの急進主義にしても，その根源にさかのぼれば，おそらくチャールズ・ジェイムズ・フォックスも誇りをもつて受けいれたであろうとおもわれるあたりまでゆくが，しかしそれは，既にして，フォックスなどの一寸ついてゆけそうもない，全く別の方向に発達した急進主義者であつた．」(1) という性格が見られるのであつて，rising nation を育生する Jefferson には，おのずから親佛的なるを目しながら，アメリカ史としては，おのずからなる親英的なるものへの近親が生まれ，ここにアメリカ特有の Americanism が生まれたものと考えられる．このことは LASKI 教授もまた説くごとく「第一，言語がこの優位を齎らす助けとなつたことは，あらそわれない．それにまた政治体制の型ということも與つて力があつた」(2) と考えられる．

かくして18世紀的合理主義者であることを持しながら，若いアメリカ合衆国を創造してゆかなければならなかつた Jefferson の祖国愛には，いささか文学的表現を弄するならば，ドイツ帝国を創設した実際的な政治家 Bismarck の祖国愛と一脈通ずる執拗さがあると見たい．しかもこのことは時代が，まさに一世紀逆しまであることによつて，かえつて Jefferson の足跡の偉大さに光輝を加えこそすれ，決して彼を損なうものとはならないと考える．いずれにしろ，その祖国への熱愛のあまり，万民三選を予想しながら憂愁の中に野に下ることを決意した Washington と同じく，冷い国民的批判を全身に浴びながら大統領の三選を辞し去つた Jefferson の悲運は，天壽を全うしながら，immortal な人類平和を樹立せんとする mortal な人間の当然負うべき十字架であつたのであろう．

註（1）ハロルド・ラスキ（東宮隆訳）；「アメリカ・デモクラシー」第1巻　PP．12—14
Harold J. LASKI; The American Democracy（N.Y. 1948）p.4
（2）ハロルド・ラスキ（東宮隆訳）；　同　上　第1巻　P．13
H. LASKI; ibid, P. 4.

（高知女子大学史学研究室）